

国語科におけるディベート

ディベートで教える

ディベートの指導には、まず、ディベートそのものを教えるものがあります。ディベートを教えるというものです。もう一つは、ディベートを使って指導するものです。ディベートで教えるというものです。

国語科においては、どちらの指導も可能です。しかし、目指したいのは、生徒の主体的な思考を促すための補助手段としてのディベートではないでしょうか。説明的文章教材の読みを深めたり、発展的な思考を進めたりする場合がそれに当たります。あるいは、文学教材の読解や鑑賞を深めるなどの利用法もあります。

ディベートをあまり大げさに考えずに、これを指導法の一つとして、引き出しの一つとして手の内に入れてしまうことが重要です。そうすれば、国語科の授業も変化に富んだ、活性化されたものになるでしょう。

総合学習としてのディベート

ディベートというと討論の一形態であり、一般的には、討論そのものを指すでしょう。これは、狭義のディベートです。もう一つには、広義のディベートがあります。それは、次のプロセスの総称であり、討論場面だけを指すのではないということです。

- (1) 論題（テーマ）の決定
- (2) 資料、データ、情報の収集と分析
- (3) 論理の構築
- (4) ディベート・マッチ（討論）
- (5) 意見文等の作成

(1) から (5) には、読む、話す、聞く、書く、調べる、話し合うなどの活動が入ります。そして、そこには、考える活動が一貫して流れています。まさに、国語科における総合学習と言えるものです。

ディベートは知的格闘技

ディベートは、言葉のボクシングであり、知的格闘技と言われます。したがって、(4) のディベート・マッチに至るまでの (1) から (3) が、ディベート・マッチに勝るとも劣らないほど重要なものとなります。これは、ボクシングのトレーニングに当たります。

また、(5) の意見文等作成では、ディベートでの立場を離れて文章を書くことで、思考の広がりや深まりを得ることができます。ここでは、(1) から (4) に秘められた大きな教育力が発揮されることになります。

ディベートの核心は、かみ合った議論です。それを可能にするのが、(1) から (3) のプロセスです。国語科においては、ディベートを教える指導を土台として、そこからディベートで教える指導へと進めていけばと考えます。